

## 「部落史の先駆者 高橋貞樹 青春の光芒」

沖浦 和光

高橋貞樹と言えば、「特殊部落一千年史」(原題)の著者であることは思い出す。これは1924年、19歳の時に書いた歴史的名著だが、未読だからそれ以上のことは何も知らない。しかし、本書のオビの文言にはこうある。

「部落史研究の先駆的成果として、いまも読み継がれる岩波文庫『被差別部落一千年史』。その著者・高橋貞樹のことはあまりにも知られていない。日本共産党史からは転向者の烙印を押され、片隅に追いやられている。若くして水平社運動、日本共産党創立に参加、やがてモスクワに密出獄して、コミンテルンで活動。秘かに日本帰国後は共産党の再建に従事するが、特高警察によって検挙、治安維持法違反により懲役15年の刑を受ける。しかし、獄中で病気が悪化、30歳の生涯を閉じる。沖浦和光が後半生を費やし追い求めた高橋貞樹の生涯が、いま歴史に刻まれる。」



1905年に大分県別府で生まれた高橋は、30歳という若さでその生涯を閉じたが、沖浦さんをして「暗夜を横切る流星のよう」と言わしめるほどのきらめきを放った。1922年には全国水平社(3月)、日本農民組合(4月)、日本共産党(7月)が結成されたが、高橋の人生もここから大きく展開していった。

その高橋の経歴を沖浦さんは次のように簡潔にまとめている。

—17歳で山川均の主宰する前衛社に入り、第一次日本共産党の周辺で活動する。1922年に全国水平社結成の報を聞くと、すぐ奈良に入り、西光万吉と共に創立者の一人であった阪本清一郎の家に一カ月も寄宿している。関東大震災後の「朝鮮人狩り」と同時に「社会主義者狩り」が激しくなってきたので、同志の小宮山富恵と共に東京を離れて大阪に逃れた。

堺の舳松部落の泉野利喜蔵方に居を置いて水平社運動の最前線で活躍し、部落の青年たちの教育に専念している。その間に多くの論文を執筆するようになる。その頃は第一次共産党が解体し、福本イズムの全盛下で、運動はまだ星雲状態にあった。26年4月にはモスクワに渡って「レーニン研究所」に入り、通訳としてコミンテルンの諸活動に参加し、共産党

再建後の綱領となった「27年テーゼ」作成の陰の立役者となる。

28年の3・15大検挙で共産党指導部が壊滅的な打撃を受けたが、その再建のため急ぎ帰国した。4つのペンネームを用いて理論と組織の両面で指導部として八面六臂の活躍をしたが、29年の4・16の大検挙でついに逮捕された。31年から開始された公判闘争では代表陳述団のひとりとなっているが、33年6月の佐野・鍋山の転向声明後、三田村らと転向を表明した。35年6月肺結核で執行停止となり、その半年後に死去した。――

高橋は、水平社運動はもちろんだが、「治安維持法」下の過酷な弾圧の時代にあって、共産党の指導部としても活躍した。しかし、「転向者」のレッテルを貼られ、正当な評価がなされずにきた。沖浦さんは本書で限られた資料と聞き取りを元に、高橋の短い生涯をたどった。まさしく、鮮烈で過酷、想像を絶する時間を駆け抜けたと言える。

1925年に「普通選挙法」と抱き合わせで可決され、1945年まで20年間存続した「治安維持法」についても書かれているので紹介したい。

### 【引用はじめ】

「日本史・現代史のはげしい波乱に満ちたもつとも困難な時代に」「あらゆる法制度のはたらきの中枢部にあたる部分を構成していたのである」と奥平康弘氏の指摘を引用し、『『世界に冠たる国体の精神』を日本政府はどのような過程を経て法制化してきたのか。そこどころが奥平氏の説く「法制度のはたらきの中枢部分」であって、…』と述べている。

そして、「緊急勅令」による改正によって「目的遂行」罪が新設された。旧法では「協議」「扇動」「利益供与」と具体的に指示されていた行為がすべて「目的遂行ノ為ニスル行為ヲ為シタル者」となった。これは、ビラの配布やカンパなども含めて無限大にまで広く解釈できるものであって、どんな些細な行動でも目的遂行罪を適用できることになった。客観的な証拠がなくても当局の主観だけで目的遂行罪が成立することになったのである。そのような拡張解釈の先例となったのが、30年11月の大審院で、「無産者新聞」を配布しただけで有罪となった判決である。

目的遂行罪の刑は「2年以上」であったが、その多くは執行猶予になった。当局ではそれは予定のコースであって、犯罪とは言えないきわめて微罪の者まで刑務所に収容しなくてもよかった。「治安維持法」違反という烙印を押せばそれだけで十分だった。

治安維持法違反は「国体変革」を目指す思想犯罪者であり、本人のみならずその家族は社会的な打撃を受け、その人生に大きなトラウマが残る。「世界ニ一ツノ神ノ国」の君主に反逆した破廉恥漢として遇され、「この世でまともに生きていく道」が閉ざされる。「赤化防止」の威嚇手段としてはそれだけで十分効果があったのだ。

しかしそれでは未来のある若い者にとってはあまりにも苛酷だという声が上がったので、当局は「転向」という抜け道を用意した。

### 【引用おわり】

狡猾・巧妙で裏の裏まで用意周到に準備された悪法だが、その力は絶大で、「国体」に触れようとする者は、ことごとく網にかけられていった。息を潜めつつも、その時が来れば、死を覚悟して打って出る、高橋もその一人だった。今まさに、この「悪夢」が 90 年の時を隔てて再現されようとしているが、やはり歴史は繰り返されるということなのか。いや、断じてそうあってはならぬ。

高橋はそうした生活の中で、「特殊部落一千年史」をはじめとする著作やたくさんの論文を書いたが、残されているものは多くはない。それは、官憲から自身や仲間、組織を守ることを最優先に考えたからだろう。妻の小宮山さん自身も高橋とはほとんど音信不通のままにあったそうだ。

沖浦さんの仕事によって澎湃として眼前に立ち現われてきた高橋貞樹は、眩しくもあるが、志半ばで倒れた無念はいかばかりかと思う。仮にかの時代を生き抜いていたなら、水平社運動も違った様相をみせていたかもしれないなあ、と夢想する。その意味でも、部落解放運動史に刻まれた「特殊部落一千年史」を読まねばなるまい。

なお、沖浦さんは本書の刊行を見ることなく、2015 年 7 月 8 日に逝去された。